日本語の遠近を表す形容詞「近い・遠い」と格助詞「に・から」

平　塚　　徹

要　旨

日本語の形容詞「近い」は，「X は Y に近い」と「X は Y から近い」の二つの構文を取る。これに対して，反意語の「遠い」は，「X は Y から遠い」という構文をとり，「X は Y に遠い」とは現代の通常の慣用では言わない。これらの構文を説明するために，以下の仮説を提案する。【仮説 1】「X は Y に近い」という場合，X と Y の間の距離が小さいという事態を，X が Y に接近するという認知的表示によって概念化している。【仮説 2】「X は Y から｛近い／遠い｝」という場合には，認知的表示において Y から X まで仮想的な移動体が移動している。これらの仮説から例えば以下のようなデータが説明される。(a)海岸は僕の家｛? に／から｝近い。(b) 私たちはもうゴール ｛に／? から｝ 近い。(c) ここ ｛? に／から｝ ゴールは近い。(d) 正午 ｛に／? から｝ 近い。(e) 味はチーズ ｛に／? から｝ 近い。

キーワード：「近い」，「遠い」，格助詞ニ，格助詞カラ，虚構移動

1．はじめに

日本語の形容詞「近い」は，次の二つの構文を取ることが可能である。

(1) 私の家は大学に近い。
(2) 私の家は大学から近い。

ところが，反意語の「遠い」は，ニ格の容認度が低い。

(3) ? 私の家は大学に遠い。
(4) 私の家は大学から遠い。

しかし，「近い」がいつでも両方の格を自然に取れるわけではない。例えば，森田（2005, p.122）は，「A は B に近い」という場合，「A・B が極端にアンバランスの場合」には，例えば，(5) の代わりに (6) のようには普通は言わないことを指摘している。

(5) 僕の家は海岸に近い。
(6) ? 海岸は僕の家に近い。

この対比は，Talmy（2000, p.314）の指摘している以下の対比と類似している。

（7）The bike is near the house.
（8）？ The house is near the bike.

X is near Y と言った場合，X の位置を Y を基準にして述べているが，Talmy はゲシュタルト心理学の概念を応用して，X を Figure，Y を Ground と呼ぶ。「自転車」は「家」に比べて遥かに移動しやすい等の理由により，「自転車」の方が Figure に，「家」の方が Ground になりやすい[1)]。（7）はこの傾向に合致しているので自然であるのに対して，（8）はこの傾向に反しているので不自然に感じられる。

（5）と（6）についても，同様の説明をすることが可能である。「僕の家」は，「海岸」と比べると，遥かに小さく，また，移動する可能性がある。そのため，「海岸」を基準にして「僕の家」を位置付ける方が，その逆よりも自然である。よって，「僕の家」の方が Figure に，「海岸」の方が Ground になりやすい。このことから，（5）は自然だが，（6）は不自然に感じられると説明できるのである。

しかし，ニ格の代わりにカラ格を用いると，森田（2005, p.122）も指摘するとおり，主語の選択による容認度の差が生じない。

（9）僕の家は海岸から近い。
（10）海岸は僕の家から近い。

これらの文においても主語の指示対象の位置をカラ格名詞句の指示対象を基準にして述べていると考えると，（10）は（6）と同様に不自然になるはずだが，実際はそうではない。

このことは，Figure と Ground という概念では説明できない。そこで，本稿では，「～に近い」という場合と，「～から近い」という場合とでは，距離の概念化の仕方が異なっているという仮説により，問題の現象を説明する。また，「遠い」という場合の距離の概念化の仕方についても，仮説を提案する。そして，さまざまな遠近表現について，比喩的なものも含めて考察する。

2.「X は Y に近い」

「X は Y に近い」という場合，X と Y の間の距離が小さいという事態を，X が Y に接近するという認知的表示によって概念化していると仮定する。ニ格が用いられていることは，認知的表示において X が Y の方へ移動していることの反映と考えることができる。つまり，「～に

近づく」や「～に接近する」のニ格と同じものだということになる。しばしば，現実には移動は起きておらず，認知主体もそのことを認識しているが，それは，別の認知的表示においては移動が起きておらず，また，認知システム全体としては移動が起きていない表示の方が現実に合致していると評価しているのである。これは，Talmy（2000, pp.99-172）のいう「虚構移動」（fictive motion）の一種と考えられる。また，認知的表示においてＸがＹに接近していると言っても，その接近は特定の位置を起点として行われる必要はない。

この認知的表示を図示すれば，以下のようになる。

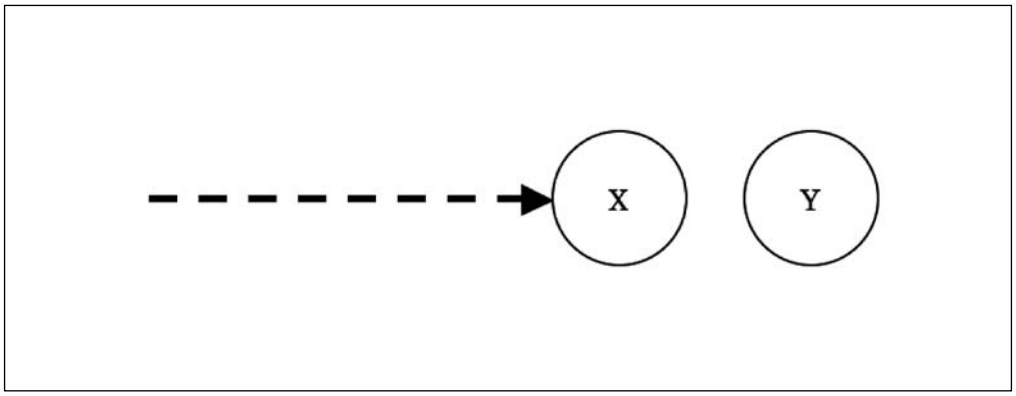

図１　ＸはＹに近い

この図で矢印は，ＸのＹへの接近を表しているが，必ずしも現実のものではないので，破線で示している。

「ＸはＹに近い」という場合には認知的表示においてＸがＹに接近していると仮定すると，(5)（以下に再掲）に比べて（6）（以下に再掲）が不自然なのは，認知的表示において，「僕の家」を「海岸」に接近させる方が，「海岸」を「僕の家」に接近させるよりも，容易だからと説明される[2)]。

(5) 僕の家は海岸に近い。
(6) ？海岸は僕の家に近い。

3.「ＸはＹから近い」

「ＸはＹから近い」という場合には，認知的表示において仮想的な移動体がＹからＸまで移動していると仮定する。仮想的な移動体が何であるかは特定されていないが，例えば，人間である場合や，単なる注意の焦点である場合が考えられる[3)]。この移動は，Talmy（2000,

pp.136-137）が「虚構移動」の一種として挙げている access path だと考えられる[4)]。このような認知的表示での Y から X への移動を仮定すれば，Y が移動の起点となることから，カラの使用が説明される。

この認知的表示を図示すると，以下のようになる。

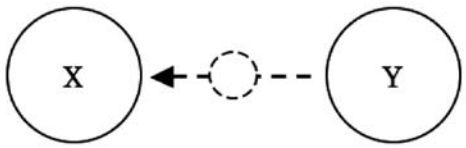

図２　X は Y から近い

この図で，移動体が Y から X へと移動しているが，この移動体とその移動は仮想的なものなので，破線で示している。

前節で「X は Y に近い」という場合には，認知的表示において X が Y に接近するものとして事態を概念化していると仮定した。そして，認知的表示において「僕の家」を「海岸」に対して接近させる方が，その逆よりも容易であるということから，(5) と (6)（以下に再掲）の対比を説明した。

(5) 僕の家は海岸に近い。
(6) ？海岸は僕の家に近い。

これに対して,「X は Y から近い」という場合には,(9) と (10)（以下に再掲）で見た通り，このような対比は見られない。

(9) 僕の家は海岸から近い。
(10) 海岸は僕の家から近い。

「X は Y から近い」という場合には認知的表示において，仮想的な移動体が Y から X まで移動していると仮定しているので，X も Y も移動しない。よって,「僕の家」と「海岸」のいず

れをXにし，いずれをYにしても構わない。これにより，(9) と (10) の間に容認度の差が生じないことが説明される。

4.「XはYから遠い」

(3) と (4)（以下に再掲）で見た通り，「遠い」については，ニ格の容認度が低く，カラ格を用いる方が自然である。

(3) ？私の家は大学に遠い。
(4) 私の家は大学から遠い。

ここでの客観的な事態は，「私の家」と「大学」の間の距離が大きいということである。この事態を，認知的表示において「私の家」を「大学」に接近させるという概念化で捉えることはできない。接近させて「遠い」というのは矛盾するからである。よって，ニ格標示の (3) は容認度が低いのである。

他方，カラ格標示の場合には，「大学」から「私の家」まで，access path に基づく認知的表示を仮定する。この場合，仮想的な移動体がYからXまで移動しており，カラ格の使用は，Yが移動の起点になっていることから説明される。この認知的表示を図示すると，以下のようになる。

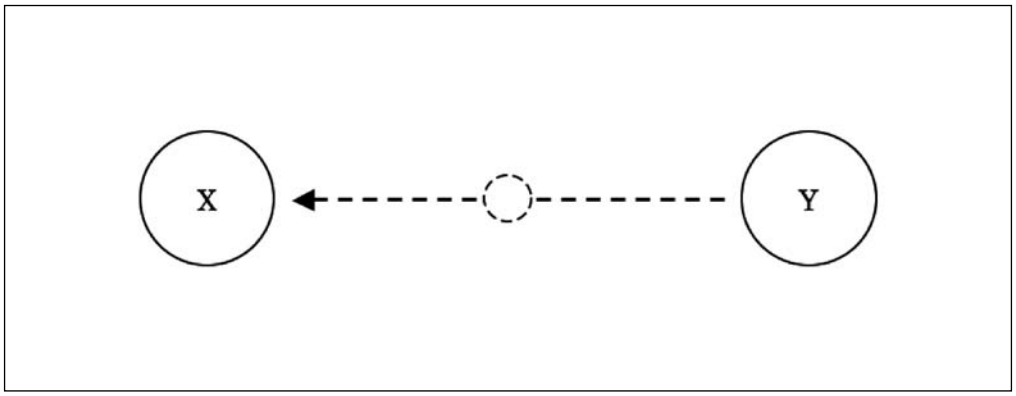

図３　XはYから遠い

ここでは，移動体とその移動は仮想的なものなので，破線で示している。

これとは別に，「XはYに近い」の場合に仮定した認知的表示（図1）にならって，次のような認知的表示を仮定することも可能である。

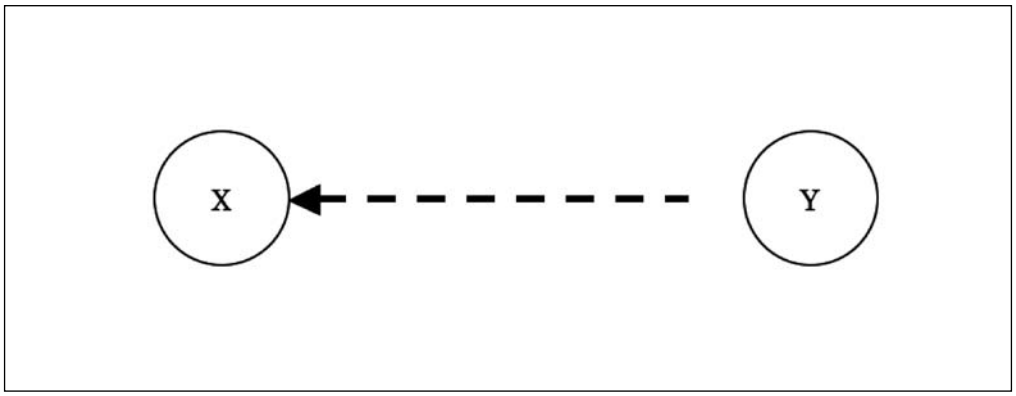

図４「X は Y から遠い」（X の移動で説明する場合）

ここでは，X が Y から遠ざかっており，カラ格の使用は Y が X の移動の起点になっていることから説明される。

この認知的表示も十分あり得るが，少なくとも，access path による認知的表示は必要である。その理由は以下のとおりである。

「X は Y に近い」という場合は，（5）と（6）（以下に再掲）の対比が見られた。

（5）僕の家は海岸に近い。
（6）？海岸は僕の家に近い。

これは，認知的表示において「僕の家」と「海岸」のいずれが移動しやすいかということから説明された。

これに対して，「X は Y から遠い」という場合には，このような対比は見られない。

（11）僕の家は海岸から遠い。
（12）海岸は僕の家から遠い。

もし,「X は Y から遠い」に対して，X が Y から遠ざかるという認知的表示しか無いとすると，「海岸」は「僕の家」よりも認知的表示において移動しにくいので，（12）は（6）と同様に不自然になるはずである。しかし，これは事実ではない。よって，「X は Y から遠い」には，少なくとも，access path に基づく認知的表示を仮定する必要があるのである。

5.「X は Y に遠い」

「X は Y に遠い」は容認度が低く，杉村（2002, p.46）は不適格としている。

（13）わが家は学校 {*に／から} 遠い。

しかし，このような表現が存在しないわけではない。森田（2005, p.121）の「「駅に遠い」はあまり現れない」という記述も，ニ格表示を排除するものではない。実際，以下のような実例が見つかる（（14）から（16）までは「青空文庫」（www.aozora.gr.jp）より）。

（14）玉川に遠いのが第一の失望であつた。（徳冨盧花『水汲み』）
（15）東京の都心に遠い某区ならびに沼津海岸（岸田國士『速水女塾　四幕と声のみの一場よりなる喜劇』）
（16）周囲は空地，町の灯に遠い。（国枝史郎『染吉の朱盆』）
（17）東に近ければ西に遠い。（ことわざ）

しかし，これらは現代日本語において慣用的な文体ではなく，むしろ文語に由来するものである。

（18）西の間に，遠かりけるを（『源氏物語　玉鬘』）
（19）峰つづき都に遠き山々の限りもみえてのこる雪かな（後水尾院）
（20）花に遠く桜に近しよしの川（与謝蕪村）
（21）この処，首里に遠からねば，敵に防禦の備あるべし。（『椿説弓張月』）

この場合は，第 3 節で見た access path により，認知的表示において問題の場所までの移動経路を辿っているのではないかと考えられる。ニ格の使用は，問題の場所が仮想的な移動経路の着点として表示されているためと説明される。この認知的表示を図示すると，以下のようになる。

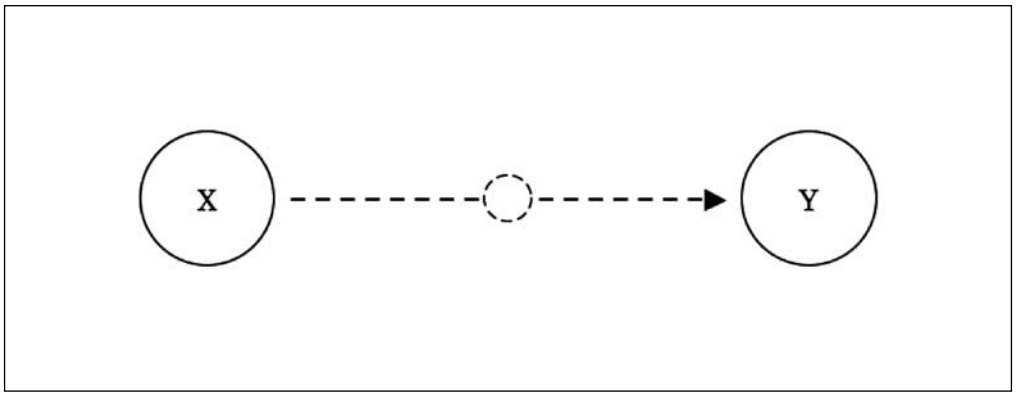

図５　X は Y に遠い

ここでは，移動体も移動も仮想的なものなので，破線で示している。

「X は Y に近い」にも access path による説明を適用すると，次のような認知的表示を仮定することができると思われるかもしれない。

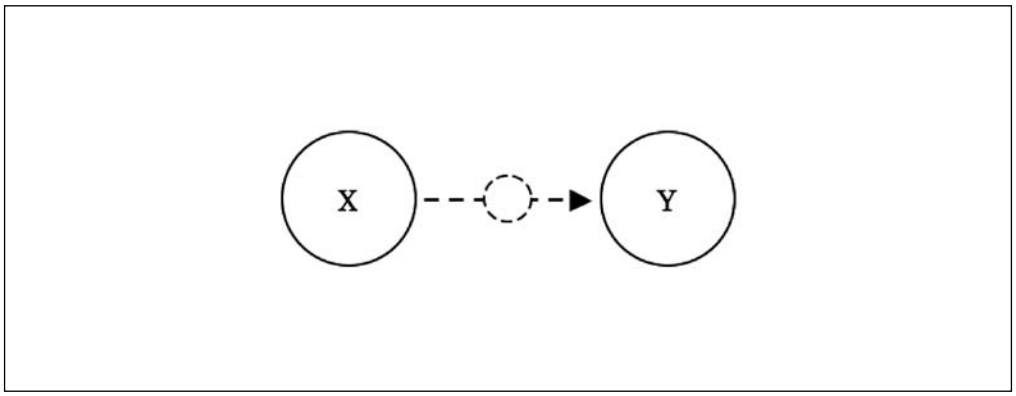

図６「X は Y に近い」（access path で説明しようとした場合）

しかし，現代日本語において，このような認知的表示はなされていないと考えられる。なぜなら，この表示からは，(6)（以下に再掲）が自然だという誤った予想が出てくるからである。

(6) ？海岸は僕の家に近い。

既に述べたとおり，(6) の不自然さは，「X は Y に近い」に対して図１の認知的表示を仮定することにより説明される。

結局，現代日本語においては，図５や図６のように対象物から基準点への仮想的な移動は行

われないとまとめることができる。

6.「もうゴールに近い」

ゴールに向けて移動している状況においては，ニ格を用いた（22）は自然だが，カラ格を用いた（23）は不自然である。

（22）私たちはもうゴールに近い。
（23）？私たちはもうゴールから近い。

つまり，X が Y に接近しつつある場合には，「X は Y に近い」は自然だが，「X は Y から近い」は不自然なのである。

このことは，「X は Y に近い」という場合には，認知的表示において X が Y に接近しているが，「X は Y から近い」という場合には，認知的表示において Y から X まで移動を行っているという仮定と合致する。（22）のようにニ格を用いる場合には，現実世界において「私たち」が行ってきた移動が認知的表示における移動と合致している。これに対して，（23）のようにカラ格を用いる場合には，現実世界において行われてきた移動が顕著であるにもかかわらず，それとは別の移動を認知的表示において行っているために不自然になると考えられる。

物理的な世界ではなく，抽象的な世界における移動の場合でも，同じことが観察される。

（24）この選手は最も優勝に近い。
（25）？この選手は最も優勝から近い。
（26）この科学者はノーベル賞に近い。
（27）？この科学者はノーベル賞から近い。

ここでは，抽象的な世界において，選手が優勝に，科学者がノーベル賞に接近してきており，その移動に合致するニ格標示は自然である。しかし，その移動とは別の仮想的な移動を行うカラ格標示は不自然なのである。

物理的空間においてゴールに向けて移動している状況に話を戻すと，「ゴール」を主語にした場合，「ここ」はカラ格標示にするのが自然であり，ニ格標示は不自然である。

（28）？ここにゴールは近い。
（29）ここからゴールは近い。

現実世界においては，「ここ」から「ゴール」に向かっての移動が行われるのだが，それに合致する移動を認知的表示において行うカラ格標示は自然である。それに対して，現実世界での移動とは異なり，認知的表示において「ゴール」が「ここ」に向けて移動するニ格標示は不自然なのである。

7.「まだゴールから遠い」

次に「遠い」の場合を考える。移動している「私たち」を主語にした場合，ニ格は不自然で，カラ格は自然である。

(30) ？私たちはまだゴールに遠い。
(31) 私たちはまだゴールから遠い。

この場合，「私たち」は現時点において存在している場所から「ゴール」に向けて移動していくとしても，この移動はまだ行われておらず，顕著なものではない。しかも，「私たち」はまだ遠くにいる。この遠くにいるという状況を認知的表示における「私たち」の「ゴール」への接近でもって概念化することはできない。よって，ニ格標示は容認度が低下するのである[5)]。

他方，「私たち」が現在いるところから「ゴール」までの移動は顕著なものではないので，認知的表示においてそれとは異なる移動を行うことも妨げられない。よって，カラ格標示は自然なのである。

同じことは，抽象的な移動の場合にも当てはまる。

(32) ？この選手は最も優勝に遠い。
(33) この選手は最も優勝から遠い。
(34) ？この 10 人の科学者の中では，彼がノーベル賞に一番遠い。
(35) この 10 人の科学者の中では，彼がノーベル賞から一番遠い。

物理空間内での移動の場合に戻ると，目的地を主語にした場合，現在地の格標示の容認度は次のようになる。

(36) ？ここにゴールはまだ遠い。
(37) ここからゴールはまだ遠い。

「遠い」という状況を，認知的表示において目的地を現在地に接近させて捉えることはできな

いので，ニ格標示は不自然である。他方，実際に行うであろう移動に合わせて，認知的表示において現在地から目的地まで仮想的な移動を行うのは自然なので，カラ格標示も自然になると考えられる。

8.「正午に近い」

遠近の概念は，時間にも適用される。

（38）正午に近い。

ここでは，メタファーにより時間が空間に見たてられている。

しかし，この表現は，通常，正午になりつつある時に用いられる。単に，正午との差が小さい時刻だということであれば，正午を過ぎてからあまり時間が経っていない時点でも「正午に近い」と言って良いはずだが，そのようには，通常，言わない。このことは，次のような副詞を伴った例を考えると，より明瞭に感じられる。

（39）もう正午に近い。
（40）？まだ正午に近い。

（39）は，早くも正午に近づいてきているという状況で用いられる。しかし，正午を過ぎた後，なかなか時間が経たないことを（40）のようには通常言わないのである。これは，時間が一方向にのみ経過するためだと思われる。

「正午に近い」という文に主語を補うとすれば，次のようになるであろう。

（41）時刻は正午に近い。

「X は Y に近い」という場合，X を Y に近づけて，その近くに位置付けているという仮定から，「時刻は正午に近い」という文は，時刻を正午に近づけて，その近くに位置付けていると考えられる。このような捉え方は，正午になる前の状態に合致している。なぜなら，この状態においては，時刻が正午に接近しつつあるからである。この時間の概念化は，時間自体は動かずに，観察者が過去から未来へと移動しているという MOVING OBSERVER METAPHOR（Lakoff & Johnson, 1999）に基づくものである。このメタファーは，例えば，次のような表現を可能とするものである。

（42）We're getting close to Christmas.（Lakoff & Johnson, 1999, p.146）

時刻が正午に近づきつつあると言う場合，「時刻」は観察者にとっての現在なので，観察者自身が正午に近づきつつあるということと同じことになるのである。

逆に，正午過ぎには，時刻は正午から遠ざかりつつあるので，そのような捉え方は不自然になる。そのため，正午を過ぎた後には，（40）のようには言わないと説明できる。

（39）のニ格の代わりにカラ格を用いることは通常ない。

（43）？もう正午から近い。

これは，時刻が正午へと接近しつつある状況において，その移動とは逆に，正午から現在の時刻へと走査することが不自然だからと考えられる[6)]。

9.「春は近い」

次の表現も，前節で見た「正午に近い」と同様に，通常，未来のことについて用いられる。

（44）春は近い。

ここでは，時間が未来から移動してきて，観察者のもとを通り過ぎ，過去へと移動していくという MOVING TIME METAPHOR（Lakoff & Johnson, 1999）が関与している。このメタファーは，例えば，次のような表現を可能とするものである。

（45）The deadline is approaching.（Lakoff & Johnson, 1999, p.143）

「春は近い」という場合には，通常，「春」を我々に接近させて，近くに位置付けていると考えることができる。このような概念化に合致するのは，「春」が我々に接近しつつある未来の時間の場合なのである。遠ざかりつつある過去の時間を，その移動の方向とは逆に，我々に接近させて近くに位置付けるという心理的操作は不自然なので，過ぎ去ったばかりの春について「春は近い」とは言わないと説明できる[7)]。

「春は近い」ほどは慣用的ではないが，次の表現も可能である。

（46）春は遠い。

この表現も，「春は近い」と同様に，通常，未来のことと理解される。基本的には，これも，時間の経過の一方向性に基づいていると考えられる。「春は遠い」という場合，現在から未来の時間である「春」まで走査して，「遠い」と言っていると思われる。この走査の方向は，MOVING OBSERVER METAPHOR において我々が今後たどる時間の経過の方向と合致している[8)]。ところが，過去の春について，現在から時間を遡る走査をして「遠い」と言うのは，我々の移動方向とは逆方向であるため，その分，自然ではないのである[9)]。

10.「近い将来」「遠い昔」

次のような例を考えると，「近い」は，未来だけでなく，過去についても使える。

（47）近い将来，近い未来
（48）近い昔，近い過去

しかし，（47）が極めて慣用的な表現であるのに比べると，（48）はそれほどでもない。

（47）は，未来の時間を我々に接近させて，近くに位置付けている表現と考えることができる[10)]。これに対して，（48）では，時間が絶えず経過し続けているということは意識されずに背景化されてしまい，時間が静態的に捉えられているのではないだろうか。つまり，我々は時間軸上の現在にいわば静止した状態で位置しているという時間の捉え方である[11)]。しばしば，時間は，時間軸という直線の上に「現在」という点を打ち，それより左を「過去」，右を「未来」として図示されるが[12)]，ここに動きを持ち込まない限り，これがまさしく静態的な時間の表象となっている。このように静態的に捉えられた時間においては，過去の時間についても，現在から走査して「近い」と言ったり，現在の近くに位置付けて「近い」と言うことが可能になると考えられる[13)]。

「遠い」も「将来」や「昔」などの語に適用することができる。

（49）遠い昔，遠い過去
（50）遠い未来，遠い将来

この場合には，未来の時間と同様に，過去の時間についても，慣用的に「遠い」と言うことができる。

季節については，時間の経過が意識されやすいために，動態的な概念化が行われやすく，その結果，過去と未来の非対称性が生じていた。しかし，（49）と（50）においては，時間が絶えず経過し続けているということが意識されずに背景化されており，時間が静態的に捉えられ

ていると考えられる。上で述べた，我々が時間軸上の現在に静止した状態で位置しているという時間の捉え方である。この場合には，過去と未来は対称的になり，いずれの方向へも走査して，「遠い」と言うことができるのである。「近い昔」「近い過去」に比べて，「遠い昔」「遠い過去」の方が慣用的な表現であるが，これは，微視的に時間を見るよりも，巨視的に時間を見る方が，時間の経過が意識されずに背景化されて，静態的な時間の捉え方がしやすくなるためであると考えられる。

11.「30 度に近い」

温度の尺度にも遠近の概念を適用することが可能である。例えば，気温について以下のように言うことができる。

（51）気温は 30 度に近い。

多くの場合，この文は，気温が 30 度を越えていないが，30 度に接近しているという意味になる。このことは，通常は，30 度が気温としては高い方だという前提があると考えることによって説明できる。

「X は Y に近い」という場合，認知的表示において X が Y に接近して，その近くに位置付けられるという仮定から，この文は，気温を 30 度に接近させて，その近くに位置付けていることになる。通常，気温は 30 度より低いという前提があると，30 度への接近はそれより低い気温からのものとなる。そのため，30 度未満となるのである。

同じ気温についての発話において，「30 度」を「0 度」に入れ替えると，通常，気温は氷点下にはなっていないが，0 度に接近していると解釈される。

（52）気温は 0 度に近い。

これも，通常は，0 度は気温として低いという前提があるということから，30 度の場合と同様に説明できる[14]。

ニ格の代わりにカラ格は用いられない。

（53）？気温は｛30 度／0 度｝から近い。

これは，気温が何度かを言う場合には，気温を温度の尺度上に位置づける心理的な操作は自然だが，気温の位置は決まっているものとして，基準点から気温まで走査することが不自然だと

いうことかもしれない。

12.「味はチーズに近い」

「近い」は類似性を表すのにも用いられる。これは，似ていることを近くにあることに喩えるメタファーによるものである。例えば，(54) の代わりに，(55) のように言うことが可能である。

(54) 味はチーズに似ている。
(55) 味はチーズに近い。

これは，認知的表示において，問題となっている味をチーズの味に接近させ，その近くに位置づけるということを行っていることに基づく表現であると考えられる。これにより，ニ格の使用も説明される。

同じ表現において，カラ格は用いられない。

(56) ？味はチーズから近い。

これは，ある味を捉えるのに，チーズの味からその味まで移動の経路を思い浮かべることが困難であるため，access path に基づいたカラ格標示は不自然になると説明できる。

そもそも，「似ている」という表現自体が，ニ格をとって，カラ格を取らない。

(57) ＊味はチーズから似ている。

これは，類似性を捉える場合には，認知的表示において対象物を基準物に接近させていることの結果であろう。

13. まとめ

本稿では，「近い・遠い」が取る格助詞について，以下の仮説を提案した。

【仮説 1】「X は Y に近い」という場合，X と Y の間の距離が小さいという事態を，X が Y に接近するという認知的表示によって概念化している。

【仮説 2】「X は Y から｛近い／遠い｝」という場合には，認知的表示において Y から X ま

で仮想的な移動体が移動している。

これに基づいて，以下のようなことがらを説明した。

・認知的表示においてXがYよりも移動しにくい場合には，「XはYに近い」の容認度が低下する。このようなことは，「XはYから｛近い／遠い｝」では見られない。
・「XはYに遠い」とは通常は言わない（ただし，文語ではニ格標示が使われるが，この場合には，認知的表示においてXからYまで仮想的な移動体が移動している）。
・現実にXがYに向けて移動している状況では，この移動と認知的表示との関係により遠近表現の容認度が変化する。
・時間についての遠近表現は，時間を空間に見立てるメタファーと認知的表示との関係に解釈や容認度が依存している。
・温度や類似性といった抽象的な領域に適用された遠近表現も，認知的表示により説明される。

注

1）FigureとGroundについては，Talmy（2000, pp.311-320）を参照。
2）認知的表示において移動しやすいかどうかは，結局のところ，FigureとGroundのいずれになりやすいかということと連動するので，この説明は，第1節で見たFigureとGroundによる説明と同じ結果になる。
3）移動体が単なる注意の焦点のようなものである場合は，「移動」というよりも「走査」という方が適切であると思われる。
4）access pathとは，静止している物の位置を，そこに至る経路でもって叙述することである。ここで，その経路を辿る移動は仮想的なものである。Talmy（2000, p.137）は以下のような例を挙げている。
　(i) The bakery is across the street from the bank.
　(ii) The vacuum cleaner is down around behind the clotheshamper.
　(iii) The cloud is 1,000 feet up from the ground.
5）ニ格標示が全く容認されないわけではない。特に文語ではニ格標示が自然である（次の例は青空文庫から取った）。
　(i) いまだ家には遠しとみゆるに（泉鏡花『竜潭譚』）
この場合には，「われ」の「家」への移動が顕著に思い浮かべられていて，そのため，ニ格標示が可能になっていると考えられる。第5節の議論を参照されたい。
6）時間軸上での時間の経過によらない移動においては，たとえ仮想的なものであれ，人間のような移動体を想定しにくい（そのような移動はタイムトラベルになる）。ここでは，移動体は，注意の焦点のようなものであろうから，注3で述べたとおり，「走査」という方が適切であると思われる。
7）「春は近い」をMOVING OBSERVER METAPHORに基づいて解釈することも可能である。この場合，我々が春に接近していることになるが，ちょうど，第6節で見た「ゴールは近い」と同じように，これからの我々の移動と同じ走査を行って，「春は近い」と言っていると考えることができる。この解釈を取っても，過ぎ去ったばかりの春について「春は近い」と言わないことは，我々の移動とは逆方

向の走査を行うことになるからと説明できる。ニ格を用いて（i）のように言えればMOVING TIME METAPHORが，カラ格を用いて（ii）のように言えればMOVING OBSEVER METAPHORが支持されるはずだが，通常はどちらも言わない。

（i）？ ｛今／私たち｝ に春は近い。

（ii）？ ｛今／私たち｝ から春は近い。

これは，観察者の位置している基準点を言語的に指示しないということであろう。そうすると，このデータからは，どちらの説明が妥当かは確証できない。ここでは，両方の解釈が可能としておく。

8）MOVING TIME METAPHORによる説明も可能である。このメタファーにおいては「春」は未来から観察者に向けて移動してくるが，この移動はまだ行われておらず，顕著なものではない。よって，それとは逆方向とはいえ，観察者から春まで走査を行うことも可能となる。(i)のように言えれば，MOVING TIME METAPHORが支持されるはずだが，通常は言わない。

（i）？ ｛今／私たち｝ から春は遠い。

しかし，注7で述べたとおり，観察者の位置している基準点を言語的に指示しないのであれば，このデータからは結論を出すことはできない。

9）MOVING TIME METAPHORでは，過去の「春」について，「春」が現在から遠ざかっていった移動と，現在から「春」までの走査が合致するので，「春は遠い」と言えることになってしまう。これが排除される理由はよく分からない。なお，次の例は，過ぎ去った過去についてMOVING TIME METAPHORを適用した表現だが，多かれ少なかれ修辞的なものであろう。

（i）降る雪や明治は遠くなりにけり（中村草田男）

また，「なる」が使われている点も注意を要する。

10）我々が未来の時間に接近していると考えることも可能である。

11）碓井（2008, 16-21）は，「静的な時間」という時間認知が存在することを指摘している。これは，順序関係のみからなる時間の捉え方であり，時間の持つ動きが背景化されている。しかし，この「静的な時間」においては，イベントの相対的な前後関係のみが問題になっており，「現在」という時点は問題になっていない。本文で述べている時間の静態的な捉え方においては，観察者が現在に静止した状態で位置し，そこを基準にして他の時点の遠近を計測している。よって，これと，碓井の「静的な時間」は異なるものである。

12）左を「過去」，右を「未来」としたのは，飽くまでも例であり，右が「過去」，左が「未来」，あるいは時間軸を縦に引いて，上を「過去」，下を「未来」とするなど，他の方向付けも可能である。

13）複合語や漢語も含めると次のようなものもある。

（i）近日（中），近未来

（ii）近頃，近年，最近

(i)が未来のことであるのに対して，(ii)は過去のことであるが，後者は現在も含みうる。前者は我々に接近しつつある未来の時について言っているのに対して，後者は現在から過去に向かって走査して，近い範囲を指すためにこのような違いが生じると考えられる。

14）基準となる温度について，高いとか低いという前提が無ければ，解釈が偏ることはない。

（i）常温に近い。

参考文献

碓井智子（2008）「時間認知モデル―7つの普遍的特性と6つの時間認知モデル」『認知言語学論考』8，東京，ひつじ書房.

杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1, 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科，39-55.

森田良行（2005）『外国人の誤用から分かる日本語の問題』，東京，明治書院.

Lakoff, G. & M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh; the Embedded Mind and its Challenge to West-*

ern Thought, New York, Basic Books.
Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1, Concept Structuring Systems*, Cambridge, The MIT Press.

The Japanese Adjectives of Distance *chikai/tooi* and the Postpositions *ni/kara*

Tohru HIRATSUKA

Abstract

The Japanese adjective *chikai* can be used with two different postpositions: *ni* 'to' and *kara* 'from', as in (1) *X wa Y ni chikai* (literally "X is near to Y") and (2) *X wa Y kara chikai* (literally "X is near from Y"), while its antonym *tooi* usually takes only *kara* but not *ni* in modern usage, as in (3) *X wa Y {kara / ?ni} tooi* "X is far from Y." In order to explain these constructions, I propose the following hypotheses: H1: The postposition *ni* is used, when the speaker conceptualizes the situation with a cognitive representation in which X approaches the location of Y. H2: The postposition *kara* corresponds to a cognitive representation in which a fictive entity moves from Y to X. These hypotheses explain many data such as (a) *Kaigan wa boku no ie {?ni / kara} chikai*. "The seashore is near my house." (b) *Watashitachi wa moo gooru {ni / ?kara} chikai*. "We are already near the goal." (c) *Koko {?ni / kara} gooru wa chikai*. "The goal is near hear." (d) *Shoogo {ni / ?kara} chikai*. "It is near noon." (e) *Aji wa chiizu {ni / ?kara} chikai*. "The taste is near (i.e. similar to) cheese."

Keywords: *chikai* 'near', *tooi* 'far', postposition *ni*, postposition *kara*, fictive motion